

アインスタイン禮讃

星見小路 虛

『私のこの理論がわかる人は恐らく世界に十二人を出でまい』彼の重力論を完成した時に、アインスタインはそう傲語した。或書は傳へます。事實彼は文字通りにそう言つたでせう。そしてこの句を讀んだ讀者の或人には『嗚呼何と言ふ傲慢な人物だらう』そう思つたものもないとは言へますまい。

今度の來朝の途次船中で『私には日本の文明が西洋に獨立に開けてゐるのが何より痛快だ』と言つたことを或新聞は傳へました。そして、アインスタインはそう言つて皮肉くつた。こつけ加へて彼をさうさう皮肉屋にしてしまつた様にも見えます。

彼は果して傲慢な人物でせうか、よく西洋人の一部に見受ける様な。又彼は果して皮肉を言ふ様な人物でせうか。私は茲に敢へて言ひます。それはみな嘘だ。

彼は春風の様な温かな人物です。彼を一度見、彼の話を一

言聞き、或は其のやわらかな手を一度握つたものは、誰か彼を愛せずにおけませう。既に他の人も彼に就いて言つてゐる様に、彼は天真な子供の様な清らかな心の持主です。彼の美しい口から傲慢な言葉や皮肉な言葉が出るはずはありません。

彼が取りかゝつた一般相對性の問題は彼自身にこつてもぎんなに難關だつたでせう。十一ヶ年の歲月は其の苦心の間に過ぎたのです。そしてその爲に彼の鬢には白銀をすら交へました。そして永い間の研究の結果が愈々天上の華の様に咲きそつた時、彼は彼が打勝ち得た難關をかえりみて子供の様な無邪氣な悦びから、『私のこの理論がわかる人は恐らく世界に十二人を出でまい』と言つたでせう。

又お伽噺の國に憧れる子供の様に不思議な東洋の國を見る爲めに——勿論到着以後はあまりに西洋化された皮相な日本の文明の爲めに、彼の心の中で考へてゐた美しい幻影は消え失せたかも知れませぬけれども——來朝する途上、彼は日本の美しい藝術のこゝを考へて日本の文明を心から讃めてくれたのでせう。そしてそれは決して皮肉な言葉ではなかつたの

です。

一寸でもアインスタインを見たものは誰れでも、以上の様な感想を抱くにちがひはありません。

東京帝國大學理學部でひらかれた相對性原理の特別講義は丁度十二月一日を以て終りました。私はそれが非常な親切な講義であつたと言ふことだけを言つてその内容に就いては言ひますまい。何となれば私には其の資格もないし、又、アインスタインの學術上の大事業に就いてはもう活動寫眞にまで仕組まれた位世の中には宣傳せられてゐるのですから。

唯私は彼の藝術的半面を讀者諸君にお知らせする爲めに、同日改造社の發起で催された帝國ホテルの會合の事を記して何かアインスタインに就いて書くべく命ぜられた私の責をつぐなひませう。

『華麗な廢城』でも言ひたい東洋味の大廣間に今、アインスタインの爲めに開かれた宴は終りに近まつた。一同は泡立つシャンパン酒の盃をあけて『吾々の』世界最高の學者の壽、永かれ三萬歳を三唱したのでした。

一廣間の一隅に、葉卷煙草の香がただやう頃となつて、人

々はこの偉大なる思想家を取り卷ひて、何か神祕的な靈感でも得たいとするものゝ様に彼の一言一句に耳をかたむけるのでした。そしてその大きなマドロスから上る幽かな煙の一片ですら、もう千金の値あるものの様に思はれるのでした。房々とした黄金の頭髮の渦卷。夢見る様に愛らしい眼、濃い口髯の奥に結された綺麗な口唇、而も偉大な柔かな體軀。これ等は決して唯理を究める自然科學者とのみは見えません。靜かな穩かな言葉、それは藝術家にしてふさわしい様なものでした。

扱て、誰一人として去る事が出来なくて過ぎ逝く時間を惜んでゐる時でした。吾々は意外な喜ばしい知らせを得たのですそれは突然山本改造社長がやつて來て、アインスタイン博士が、ヴァイオリンを奏する事を快諾されたと言ふ事でした。

やがて一つのヴァイオリンは彼の手に運ばれました。彼はそれを手にして美しい微笑を浮かべながらこうつぶやくのでした。

『もう私は二ヶ月もそれを弾いた事がない。だから、とても拙く弾くことだらう』

そして彼はそれを手にしてピアノの室にま行くのでした。

華かな電燈は柱の中からその光を漏して、樂堂も又その周圍の階下にも、今し麗しい、そしてそれは『四次元の世界』から響いて來るであらうシムフォニアを聴かん多くの人々が集まるのでした、その中には丁度さまり合せた外國の旅行者たちも交つてゐたでせう。

アインシュタイン夫人はピアノにつきました。そして彼がヴァイオリンをこつて弾き出した時には彼は一切の外界を忘れて藝術の殿堂の奥深くつき進んでゐる様に見えました。ゆるやかにその上軀をゆり動かして幽玄な旋律を辿る時の彼の顔は『聖』に近い或物があると言つた方が一番適切な形容でせう。

音樂の知識に全く乏しい私には彼の技能に就て彼是れ批判する事は出来ませんけれども、兎に角彼が相對性の困難な原理を講義をしてゐる時よりも嚴肅な顔であると言へませう。

私は私の隣りに居た或る紳士が彼が弾いてゐる曲がベートーベンのクロイツェル、ソナタである事を話してゐるのを聞きました。

* * * * *

往々にして散文的な性格と無趣味な感情とのもち主となりたがる自然科學者の中でアインシュタインの様な詩的な性格の學者を吾々の現代に見出し得たことは何と吾々の悦ばしい誇りでせう。私は今この稿を擱くに石原博士のアインシュタイン讃歌の一節をもつてしませう。

アインシュタイン

私は彼を限りなく愛します。

こゝろから彼をふかく尊敬します

彼は私たちの安住の世界を

あのほらかな彼岸のちかくへまで

おし廣めてくれた

私たちの恩人でなければなりませんもの。

アインシュタイン

アインシュタイン

いま彼の名をたからかに讃へませう。

完